

# 下頭橋由来

吉川英治

青空文庫



飯櫃いびつ

十八になるお次つぎが、ひとつの嫁入りの資格にと、巢鴨村すかもむらまで千蔭流せんいんりゅうの稽古けいこに通い始めてから、もう二年にもなる。

その間ずうつと、彼女は家を出るたび帯の間へ、穴のあいた寛永通宝を一枚ずつ、入れて行くのを忘れた日はなかった。

「あんな、張合いのある乞食こじきつてないもの——」

と、自分の心へ言い訳する程、彼女はそれを怠いとらなかつた。

河原から憐あわれっぽい眼を上げ、街道の旅人へ、毎日、必死に頭を下くだげているお菰こもの岩いわ公こうが、自分の姿を仮橋の上に見ると待まちっていたように百遍ひゃくへんもお辞儀じぎをする。

「——あんな一生懸命いっしょうけんめいなお辞儀じぎつて、誰たれだつてしやしないもの」

と、それを受けるのも、楽たのしみだつた。

きょうも、石神井川いしがみいがわにかかつて、

(岩公、いる?)

と、お次は、下を覗いた。

一ぺんも言葉こそ交わしたことはないが、きようは岩公が何か欣んでいるか、考えているか、体の具合がいいか悪いか、お次にはよく分った。

(あ。お嬢様)

岩公も、大家の娘へ、声をかけては悪いと思うのか、眼で、眸で、お辞儀だけで、もうその姿へ呼びかけた。

ぽちやん、と仮橋の下で、小さな水音がした。

「あら」

あわてて、お次の手は、髪へ行つた。泣きたい顔になつた。

銀の釵が沈んでゆく。

嫁入りまで、挿してはいけないと、母にいわれたのを――

沼尻の川なので、浅そうに透き徹つては見えるけれど、底泥土がやわらかで、仮橋から墜ちた子供などが、何人もそこでは死んでいた。

怨めしげに、水を見ていた。

でも、仕方がないと、諦めたように、お次が悄悄々と立ち去つてゆくと、河原にいたお

菰の岩公は、泥土の中へ、そろそろと入って行った。

「おお深けえ」

底は<sup>すべ</sup>はる。

いくらでも、脚が入る。

でも岩公は、やめなかつた。腰から胸までへ、泥だらけの蓮根<sup>れんこん</sup>掘り<sup>ほ</sup>みたいに、釵を探した。

「ねえつてことはねえ。ねえつてことはねえ」

独りでぶつぶつ言いながら、日が暮れるのも知らなかつた。

紫木<sup>むらさきもめん</sup>綿の包みを胸に、稽古を終えて帰って来たお次は、星明りの水に、獺<sup>かわうそ</sup>みたいな

人影が、ざぶざぶ動いているので、

「おや、誰？」

と、眼をまるくして、

「——岩公じゃないの。何してるの」

「不思議だ。ねえ筈はねえ」

「何が」

「お嬢様の」

「あら。おまえ私の釵を探していてくれるのかえ。そんなら、もうよしておくれ。風邪をひくよ、寒いのに」

お次が、しきりに止めたので、岩公はむっそりと河原へ上がった。

「——有難うね」

初めて口をきいたのだった。

飯橋をこえて、振りかえると、岩公が薄暗い河原で、大きな嚏くさめをしていた。

翌る日、お次はまたそこへ来て、

「まあ岩公、まだ探してるの」

と、吃驚びっくりした。

「ねえ筈はねえもの」

岩公は、同じことを答えた。

三日目も四日目も真っ黒になつて、泥土の中を脚や手で探っている彼を見た。お次は、街道の旅人や、土地の人にも、きまりが悪くなつて、

「頼むから、もう止めてね」

と、いった。

岩公は、やめなかつた。

「ねえ筈はねえ」

と、いった。

「後生だから、止してよ。止さなければ、私、もう明日あしたからここを通らないから」

そういつて、脅おどかすと、やっと次の日は、飯櫃いびつを前において、岩公は河原に坐つていた。

慾でやっていたのか。

でなければ、少し抜けているのか。

お次は何だか、岩公に少し嫌な気がさしてきた。

もうそんな事も忘れて、冬を越した。春は、大根の花が咲く。

練馬といえは大根の産地なので、殊ことさら、沢庵漬問屋たくあんとは呼ばない。樽屋という旧家だった。彼女はそこの娘だった。

石神井川の仮橋は、豪雨があるとすぐ流された。

また、半町ばかり、新しい仮橋は、位置が変つた。お次はこの頃、橋の下を見ないこと

にしていたが、その日、

「お嬢さん。ありましたぜっ」

と、ふいに河原から声をかけられて、吃驚した。

かんざし  
釵かんざしを持って、岩公が駆け上がって来た。

「ま」

「あつたよ。あつたよ」

お次は、眼が熱くなった。

彼女へそれを渡すと、岩公は、満足そうに河原へ降りて行った。飯櫃の前に坐つて、もう後へ来る旅人の影へ、頭を下げていた。

### 漬物倉

根からの乞食でもあるまいに、

土地の者は、岩公を理解するに苦しんだが、この頃では彼の姿が見えない日は、みんなして、

「どうしたのか、病氣じゃないか」

と、心配する程だった。

なぜなら、岩公がこの土地に流れて来てから、泥棒や火事がなくなった。また、石神しゃくじ井川へ墜ちた子や子守を、四度も救っていた。また、汚い物は人が寝ている間に、河原へ運んで焼いてくれるし、後はきれいに箒ほうきめ目が立っていた。

「変な男だ。だが可愛い奴だ」

と、練馬板橋の人々は、余る食べ物があると、河原のかまぼこ小屋へ、やりに行った。

この土地へ流れて来てからも、十二、三年になる。酒を飲むふうもなし、女が欲しそうな顔でもない。年もまだ三十四、五だろう。身体も満足なら顔だちも人並だった。背が小つちやくつて、丸顔で、笑うと愛嬌さえある。

村の悪童たちは、

「岩ンベ。岩ンベ」

と、石をぶついたり、上から小便をひっかけたりした。岩公は笑ってるだけだった。ここは、甲州の裏街道なので、旅人もよく通る。岩公が一心に頭を下げるのを見ると、

「一文は安い」

と、よく合羽の袖から、鑓びたせん銭せんが投げられた。

午ひるまえの稼ひるぎを数えて、岩公は、藁わらを穴とほに貫とおしていた。それから飯櫃いひくのめしを食べ、首をのぼして川の水を啜すすった。

陽かげろう炎えんが立つて、眠くなるような昼だった。仮橋の上に、旅支度の武士が、じつと下を見ているが、

「はてな」

と、眩つふやいた。

岩公は、仰向いて、

「がぼ、がぼ、がぼ……」

と、口の中で水を鳴らしていた。

いきなり、羽織を脱ぎ捨てた武士は、

「おのれっ、佐太郎だなっ」

と、上から呶鳴った。

「げっ」

岩公の口から、水が、びゅつと走った。

「うぬ、よくも多年、姿を晦ましおったな。勝負をしろつ」

河原へ、飛び降りた。

反対に、岩公は、上へ逃げ上がった。まるで転がるように、迅<sup>はや</sup>かった。

「卑怯者つ」

武士もつづいて、飛び上がった。しかし、街道にはもう人影が見えなかった。草鞋<sup>わらじ</sup>に白い埃<sup>ほこり</sup>を立て、

「亭主つ、今この前を、乞食が逃げて行ったか」

と、居酒屋の前で、息を弾<sup>はず</sup>ませた。

「なに、通らん。——すると、畜生」

引つ返して、横道へ走った。葭簣茶屋<sup>よしずぢや</sup>を目がけて、

「ちよつと、物を訊くが」

「え」

休んでいた町人達が、

「何です、お武家さん」

「今、その河原から逃げ上がった若い乞食、どっちへ行つたか知るまいか」

「知りませんね」

「はてな」

と、茶屋の裏へ廻つて、

「あつ向うだつ」

と、仮橋の板を踏み鳴らして、どんどん駈け出した。大根畑の白い花をちらして、岩公の逃げてゆくのが、遥かに見えた。

「おういつ。佐太郎」

武士は、二度も転んだ。

「貴様も武家の飯を食った男でないか。卑怯な奴。待てっ」

だが、岩公は、振向きもしなかった。練馬の部落へ逃げ込んだ。

水車が止まる。あっちこつちで、鶏の群れが、けたたましい叫びをあげ、翼を搏つた。

「臆病者ツ、人非人めつ。返せつ、待てつ、弟の敵だ、妹の」

唼鳴りながら、旅の武士は、目や鼻をひつつかせて、泣いていた。そこへ持つて来て満面の汗と埃が、凄い形相を彩っている。

旧家らしい土蔵つづき、その母屋の前庭へ、向う見ずに駈け込んだのである。どこか

で一度、斬りつけたとみえ、右には拔刀ぬきみをさげていた。

樽屋たるやの家族は、お次の婚礼が近いので南縁に縫ぬい物をひろげていたが、

「きやつ」

と、逃げ惑つて、

「あれつ、誰か来て——つ」

と、叫んだ。

漬物蔵から、向う鉢巻の若い者が大勢駈け出して来た。

「やいつ武士さんびん、うぬあ気狂いか」

と、武士を支えた。

「狂人ではないつ、拙者は小田原の大久保加賀守の家来、岡本半助という者。今その漬物蔵へ逃げ込んだは、隣家の秋山家にいた若党の佐太郎という者。……あ、水を一杯くれ」

「水だとよ。贅ぜいたく沢をいつてやがら」

「忝かたじけない——。話が、前後したが、それはもう十三年も前だ、若党の佐太郎めに騙たばかられて、

拙者の妹八重は家出した。それを連れ戻そうとして、追つて行つた拙者の弟は、佐太郎めに討たれ、妹は、前非を恥じて、自害いたした」

「へえ？」

「弟きょうだい妹いもうと二人の敵かたき、佐太郎めを、以来尋ね廻ること十年あまり。それを、見つけたのだ。

——この床下へ隠れ込んだ乞食もぐめが、昔の若党佐太郎に相違ない。各、恐れ入るが、こ  
こへ潜もぐつて、追い出して下されい」

誰も、返辞をしなかった。

お次は、老母のうしろに、白い顔をして、戦おのきながら聞いていた。

「たのむ。武士がこうして——」と、見苦しい程、昂奮してる岡本半助は、膝の下まで手  
を下げて、

「お情けじゃ、追い出して下され」

でも、みんな、黙然としていた。

「御承知なくば、やむを得ん、拙者自身で入る程に、無作法、おゆるし願いたい」

「あ……」

お次は思わず伸びあがった。

すると、若いのが、

「おっと、待ちねえ」

「なんじや、何で止める」

「あのお菰こもは、村の者はよく知ってるがそんな悪人じやねえ。敵かたきなんか討ったつてつまらねえ話だ。堪かんにん忍してやんねえ」

「黙れつ、町人とはちがう。また佐太郎が悪人でないと、何を証拠に」

「だって、どう考えたつて。——なアおい」

「よし、其そのほう方どもが拒むなら、彼奴きやつが、這い出して来るまで、ここに頑張つておるぞ」

「それや、勝手だ」

武士は、そこにあつた竹竿に目をつけ、蔵の中へ、突つ込んで、掻き廻した。

「佐太郎つ、出て来い。もはや、汝の天命は尽きたのだ。いさぎよく、半助に討たれろ」

若い者たちが、舌打ちして、

「やかましいや」

と、竹竿を引ひつ奪たくつた。

「敵かたきを討つのが、武士さむらいの商売なら、こちとらにも、稼かせがぎ飯にならねえ商売があるんだ。邪魔だから、退のいてくれ」

わざと漬物樽を幾つも転がして半助を追い退けた。

半助は、齒がみをしたが、どうも出来なかつた。ここから近い川越藩へ行つて、仇討免状を示し、正当な手続きをとれば、捕えられぬこともないが、その間に佐太郎を逃がされる、何にもならない。

「うむ、根くらべだ。彼奴も、食わずにはおられまい」

半助は、蔵のまわりを歩き出した。五日でも、十日でも、こうしているぞというように、唇を嚙んでいた。

## 大根月夜

ぴた、ぴた、と半助の躑音あしおとが、夜半よなかでも外に聞えた。

「お次、そなたは、こんな果報が、嬉しゅうないのか」

と、樽屋たるや三右衛門は、父として嫁入り近い彼女の沈んでいることが、気懸りでもあり、不足でもあつた。

島台しまだい、紅白の縮緬ちりめん、柳樽やなぎだる、座敷は彼女の祝い物で一杯だった。家族たちは、毎晩のように、忙しげに、夜を更ふかした。

「いいえ」

お次は笑ってみせた。

でも、<sup>えくぼ</sup>鬚に何となく陰があつた。

「まだ、何か不足があるのか」

「勿体ない」

「あるなら、言うがよい。……なんだ……なんだお前、泣いてるじやないか」

「だって、あたし、可哀そうでならないんですもの。こんな倅せな私にくらべて」

「誰が。アア後に残る祖母<sup>ばあ</sup>さんの事か」

「いえ、あの……岩公が」

「何をいうかと思えば、お菰の岩公を。はははは、おかしな奴じや、なるほど、岩公もふびんだが為<sup>な</sup>した罪業<sup>ざいごう</sup>、悪因悪果じや。あのお武家の熱い根気にも、わしは感じた。もう

今夜で、三日三晩、ああしてござる」

「嫌な人ですね」

「お武家として、立派な事だ。でも、若い奴らは、<sup>がん</sup>頑として意地張ったまま、岩公を渡さぬようだが、もう興<sup>こしい</sup>入れも近いのに迷惑千万、あしたは、わしが若い者を説いて、渡して

やろうと、思っているのじや」

「お父さんの情なしっ」

と、お次は、袂たもとで父を打つ真似して、

「嫌です、私は嫌」と、かぶりを振った。

泣いているのである。三右衛門は、単純な処女おとめの感傷とおかしく眺めていたが、果てしない彼女の涙に、

「なぜ、そんなに」

と、少しきつい眼とがで咎めた。

「でも、私は何だか。——お父様、後生ですから、助けてやって」

「そうは行かない。お武家様が、見張っているものを」

「けれど、こうなれば……」と、お次は、一心になって考えたような智慧を、父の膝に甘えて囁ささやいた。

「庄吉をよべ」

しばらくすると、彼の居間で、手が鳴った。若い者の庄吉は、主人の三右衛門と何か密ひそ々と話し込んでいたが、翌朝になると、向う鉢巻をした十人ばかりの男達と一緒に、

「それ、積んだ、積んだ」

と、蔵から二十樽ほどの、沢庵漬を転がし出した。

「届け先は、日本橋の大丸だぜ」

大八車へ、それを積むと、縄をかけて、勢いよく曳き出したのである。お次は、心配そうに、窓から見ていた。

「さすがのお武家も気がつかない。どうじやこれでよかろう」

「え」

にこと、淋しく頷いた。

窓からその顔が消えると、じつと、蔵の蔭に立っていた岡本半助は、道をかえて、外へ駈け出していた。そして、乾いた街道を、白い埃につつまれて行く荷車の後から、

「敵つ、佐太郎待てつ」

と呶鳴った。

きらつと、陽の光をかすめた刀の白さを見ると、若い者たちは、

「来やがった」

と、叫んで、われ勝ちに、避けた。

大八車の梶が、どんと前に落ちた弾みに、半助の刃が、樽の縄を、めちやめちやに切った。山に積んだその上から、一つの空き樽が真つ先に落ちた。

ころころと、生き物みたいに、樽が先へ出た。そして、ぽんと蓋ふたが脱とれると、その中から、糠ぬかだらけになった岩公が、飛び出した。

「このツ——」

がつんと妙な音が聞えた。

畑もぐに潜もぐって見ていた若い者たちが、思わずわつと言った時は、そこが真つ赤になつてもう岩公の首が見当らなかつた。

右に血刀と、左の手に、生々しい首を引つ掴んで、岡本半助は、気が狂つたように、畑の中の裸街道を一目散に駆け出していた。げらげらと笑つてゆく声が、茫然と見ていた若い者たちの耳に残つた。

「岩公が殺された。岩公が——」

と、村の者が、真つ黒に集まつて来た。そして、口をきわめて侍ののしを罵ののしつた。

首のない死骸が河原のかまぼこ小屋へ、運ばれた。ここで通夜をしてやろうと、いう者も出て来た。

すると、小屋の中を、掻き廻していた男が大変なものを見つけた。造り酒屋で糟かすを絞るのに使う真つ黒な麻の袋だ。それに、岩公がきようまで、頭を下げた稼いだ金が、ほとんど、一文も費つかつてないように、串くしにして、いっぱいに詰くっていた。

かぞえてみると、ひどいもので、七十四両と若干なにかしになつていた。そして、袋のうえには、なるほど、武家奉公もしたらしい見事な書体で、

げとうおくまんべん 一罪消業

と、書いてあつた。

その他ほかには、何にもない。

代官所の認可ゆるしを得て、村では、それから間もなく七十余両の鋌びたせん錢で街道安全の橋はし普請しんに取りかかった。

× × ×

月が美しかった。

大根の花だの、菜の花だの。

畑の中を提ちようちん灯がたくさん並んで、江戸の下町へ嫁とついでゆくお次の輿こしがゆられて来た。

「おじさん、ちよつと止めて」

石神井川の上だった。

普請なかばの仮橋の上に、お次は、駕をとめさせた。紋付袴もんつきはかまの叔父だの伯母だのに  
囲まれながら、大根の花の村を、じつと見ていた。

「——別れじやもの」

と、伯母も、媒なこうど人も、駕のうしろでそつと眼をふいた。

(岩公、左様なら……)

晴れの黒髪から、銀の釵かんざしを抜き取って川の中へ、そつと落した。——細い月の光が、キラキラと沈んで行った。

# 青空文庫情報

底本：「柳生月影抄 名作短編集（二）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年9月11日第1刷発行

2007（平成19）年4月20日第12刷発行

初出：「オール読物 五月号」

1933（昭和8）年

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年1月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 下頭橋由来

吉川英治

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>